

「生命情報学を使いこなせる女性人材の育成」プログラムを終えて

お茶の水女子大学長 郷 通子

21世紀は生命科学の時代であるといわれます。20世紀の後半は物理学や化学のめざましい発展があり、これらを基盤として分子生物学へ向かう扉が開かれました。21世紀に入り、ヒトのゲノム情報が解読され、多くの生物についても、その遺伝情報を、人類は、今、手にしつつあります。遺伝情報の詳細がわかったことで、生命の設計図の細部まで見えてきました。

設計図がすべてわかったということは、生命科学に革命的な変化をもたらしました。これまでの生物学は、生命の一端を研究しているにすぎませんでした。いろいろな現象を見ていても、全体像を見ることはできなかったのです。今、設計図全体を視野に入れながら、個々のおもしろいテーマを追求していける時代がやって来ました。生物学が体系化される時代に入ろうとしています。

しかし、生物が生きていることを理解するためには、設計図を見ているだけでは、わからないことばかりです。これからの生命科学は、ゲノム情報に加え、ゲノムを元に作られ、生命活動の立役者であるタンパク質やRNAの情報、細胞内または細胞間での分子間の動的挙動情報などを基礎データとして、その上にあらゆる生命科学が築かれて行くに違いありません。すなわち、生命情報学がこれからの生命科学の研究者に必須の科目と成ります。この潮流は基礎から応用まで生命科学の広い分野に及んでいます。

「魅力ある大学院教育」イニシアティブにお茶の水女子大学の「生命情報学を使いこなせる女性人材の育成」プログラムが採択され、平成17, 18年度の2年間、実施されました。学内外の多くの方々のご協力を得ながら、ややなじみの薄かった生命情報学のカリキュラムを組み上げ、21世紀の女性研究者が求められているこの新しい分野をスタートさせることができました。

お茶の水女子大学の理学部5学科（生物学、化学、物理学、情報科学、数学）の充実した基礎教育には、伝統的に定評があります。大学院では、理学系分野に加えて生命科学系の食物栄養学などの分野も同じ研究科で学びます。

生命情報学という新しい分野を、専攻を超えて大学院生と一緒に学ぶことができたことは、本プログラムが採択されたことによる大きな成果です。最先端生命科学の研究者として、あるいは企業でバイオテクノロジーに従事する者として、あるいは最先端の生命科学の教育を担う教員として、必須科目である生命倫理もカリキュラムに加えました。

博士後期課程でのインターンシップは、本学では初めの試みであり、他大学でも、あまり例を見ない画期的なことです。1ヶ月にわたるインターンシップ生の受け入れを、快諾下さった研究所と企業の方々による温かいご支援は、本学で博士号を取得後のキャリア選択に大きく役立つものと信じます。お世話になりました学内外の先生方に、心から感謝いたします。